

# 西行伝説形成論

佐々木りほ子

## 目次

### 序

#### 本論 第一章 『西行物語』

#### 第二章 西行説話の背景

#### 第一節 様々な説話集中の「西行説話」

#### 第二節 『撰集抄』との関連をふまえて

#### 第三章 西行伝説の形成

### 結び

### 序

明治の末期に、その説話の虚構性が厳しく論求されてより、西行の研究は、説話に描かれている西行像を虚像として切り捨て、彼の作品の解釈・鑑賞をもとに実像を定立することを主たる目的として進められてきた。しかし、中期の歌人・連歌師・謡曲の作者から江戸時代の俳人に至るまで、彼らが思慕・憧憬してやまない西行像とは、実の部分と虚の部分とを併せ持ったもの、すなわち虚像と実像と

の混淆の中にこそあるものであった。芭蕉も、当時西行の伝記とされていた『西行物語』や西行自記の書と考えられていた『撰集抄』を愛読した一人であり、数々の紀行文文中にそれらの影響が指摘されている。

今挙げた『西行物語』と『撰集抄』が虚像西行を語ってきた中心的存在であったのだが、奇しくもこの二書はほとんど期を同じくして成立している。それのみではない。他の説話集中に西行説話が登場するのもまさに同時期、すなわち十三世紀半ば、一二四〇〜一二五〇年頃に集中する。西行の没後わずか五、六〇年のことである。

このように没後間もなくにして、しかも一時期に集中して西行説話が語られはじめたのは、一体何に因るものなのか。本論では、西行説話の内容を分析することによって当時の人々の西行観を探り、虚像西行形成の源泉について考察していきたい。

### 本論

#### はじめに

表1 西行説話・成立順

西暦	西行没	説話集
一一九〇		
一一一〇	*	『発心集』
一一二〇	*	『保元物語』
一一四〇	*	『今物語』
一一四七	*	『源平盛衰記』
一一五〇	*	『西行物語』
	*	『撰集抄』
一二五二		『十訓抄』
一二五四		『古今著聞集』
一二八三		『沙石集』
一四〇七	*	『三國伝記』
室町期	*	『お伽草子』

\*示推定年

卒業論文においては、表1に挙げた説話集についての分析・考察を行なったわけであるが、本稿では、その結果、様々な西行説話を総合的に有していると判断した『西行物語』を主に取りあげ、論じていくこととする。

第一章 『西行物語』

『西行物語』は西行の一生を実録風に描いた物語である。「実録風に」と記したごとくその内容は、事実と交えて虚構をも含む。ここではその虚構部分に焦点をあわせてこの物語を分析し、その構造を明らかにしたい。

1. 収載される和歌について

『西行物語』には全二〇九首の和歌が収載されている(文明本)。一首が重出、十八首が他人の歌で、西行実詠歌は一九〇首であるが、このように多数の和歌を収載したのは、おそらく作者が『西行物語』に西行歌集としての性質を備えさせようとしたからであろう。

また、その一九〇首の内訳をみると「新古今和歌集」入集歌が九一首も数えられる。「新古今和歌集」中の西行入集歌九四首のうち、ほとんど全てといえる九一首の採用は注目すべきであろう。その九一首中には物語の筋を形成するには困難な△題知らず▽七四首が含まれており、それらは平泉で詠んだ△恋百首▽仁和寺の御室にて詠んだ△月百首▽等をわざわざ設定することによって処理されている。つまり『新古今和歌集』入集歌を「西行物語」に収めてしまふことが作者の意図としてあったと考えられよう。これは作者が西行を「新古今筆頭歌人」として強く意識していたからではないだろうか。

とにかく、これらの歌の存在は、「西行物語」において、西行の歌人としての面を語るのに大いに貢献している。

2. 妻子譚(一)

『西行物語』における西行とその妻、西行と娘との関係には、それぞれに深い愛情の結びつきを感じることができ。その固く結ばれた夫婦の絆、親子の絆を通して、西行の人間性が窺えよう。が、一面で、そのような愛情をも振り切って仏道へと走った西行像というものも、対照的に浮かびあがってくる。

### 3. 出家譚、往生譚

△年頃たへがたくいとほしがりし四歳なる女子▽を△はこそは煩惱のきずなを切るはじめと思ひて、縁より下に蹴落し▽たとする西行出家のエピソードは広く知られている。しかし、より著名であるのが、△重代ノ勇士▽たる家も北面の武士としての名も捨て、△家富ミ年若ク、心ニ愁ヘナクシテ、遂ニ以テ遁世ス▽と記された藤原頼長『台記』の西行評であろう。この心に愁へなくして純粹な道心に導かれるままの出家、は人々に嘆美されると同時に、様々な俗的な憶測を生んだ。現在も失恋説、政治説、遁世への憧憬、数奇に生きようとした、等、出家の原因について、様々に論じられるが、結論は出ないままである。

ところで、現在、その出家と共に多く語られるところの往生譚はどうであろうか。

西行は晩年、△願はくは花のしたにて春死なむそのさきらぎの望月のころ▽という歌を読み、その願い通りの最期を遂げた。このことは当時の友人や知人たちに深い感動を与えたとみえて、藤原俊成の『長秋詠草』など、四書にその死が記録されている。が『西行物語』においては、それら文献の示す資料と、細かい点ではあるが相違がみられる。そこで、その虚構部分形成の意図について考えてみたい。

まず、実際には十六日であった入寂の日が十五日となる点は、△願望どおりの往生ということとは西行の入寂を無比のものとした。西行往生談はその上で十六日ではなく、まさに釈迦入滅の十五日に語るところにこそ関心が寄せられ

る▽と、坂口氏の述べられるところのものであろう。実際には七十三歳で入寂した点が八十歳となっていることも、釈迦が△御ン年八十ニシテ▽（『三国伝記』）亡くなったことに擬したものだと考えられる。もう一つ、入寂の場所が、弘川寺ではなく双林寺となる点はどうか。双林寺周辺に集う念仏聖などの遁世者たちが伝説を形成したとする説（坂口氏）と、双林寺という名が釈迦入滅の場所を想起させるとして「西行物語」の作者が意図的に選び出したとする説（谷口氏）<sup>注3</sup>がある。が、両説とも、西行の釈迦入滅に比せられる最期<sup>注3</sup>に感動した人（たち）によって虚伝が作りあげられたのだ、という点においては相違はない。ここで出家譚に描かれたところの義清と妻子との別れや、鳥羽院から頂く数々の誉れを振り切るところを、△妻子珍宝及王位▽を振り捨てて出城した悉達太子に重ねられたものであると考えてみれば、「西行物語」の出家譚・往生譚に作者が託したこと、すなわち西行と釈迦とをオーバーラップさせる構造というものが読みとれるのである。

#### 5・6 修行譚・交流譚

以上述べたほかに、『西行物語』の特徴としては、西行の修行譚、つまり諸国行脚をクローズアップさせ、旅から旅の人生として描いたこと、和歌の詞書などから察せられる友人との交流面を多くとりあげたことが挙げられる。

#### 第二章 西行説話の背景

##### 第二節 『撰集抄』との関連をふまえて

『西行物語』以外の西行説話のうち、最も後世に影響を

与えたとされるのが『撰集抄』である。長い間、西行自記の書として親しまれてきたが、現在ではそれが否定され、「西行仮託の書」と呼ばれている。その内容であるが、西行自身のことを描いた箇所は少なく、全九巻一〇話の説話中、十三話が西行に關連のある説話であるほかは、何ら西行について言及するものはみられない。さらに、その十三話中でも、西行を主人公とする話は巻第五第十四と、第十五の二話に過ぎない。つまり他の百余話においては、西行が廻国修行中に会った、あるいは伝え聞かるところの、理想的な遁世者が主人公として描かれているのである。ここに、『撰集抄』は西行を案内人としながら、遁世者たちの説話の数々を描くことをそのテーマとしている作品である、ということができよう。

ところで、西尾氏は、『撰集抄』の登場人物を、西行であればこのような言動をとると考えて描かれた△西行的人間▽と、その△西行的人間▽によって共感された△西行好みの人間▽の二種に分けて述べておられる。先に述べた十三話中に登場する「西行」が、西尾氏のいう△西行的人間▽なのであるが、この△西行的人間▽を考察するにあたり、『西行物語』との關連が気に掛かるところとなる。『撰集抄』においては僧侶としての西行が強調され、歌人としての彼は控え目に描かれるという大きな相違点はあるものの、その他の面には類似点も多い。列挙すれば、(ア)待賢門院關係の女房との交流を描く(イ)西行との交流を描く(ウ)高野・吉野を舞台に選ぶ(エ)江口の遊女との贈答をもとに一つの説話

を形成した(オ)西行の妻の描写(ウ)四国修行の旅に言及している(キ)崇徳院の話(ク)△無常心にしみて、君の忠勤よしなくて妻子をふり捨て出待しかば▽と語る部分、等である。そのほかにも西行の廻国修行者としての性質が、どちらにおいても話の根底にあることなども特筆されよう。

このように考えてみるものの、『西行物語』と『撰集抄』はどちらかが一方を典拠にして成ったと言いつけることはできない。なぜならば、その成立年次が極めて近く、当時一冊の本がある程度流布するに要する時間を思えばそれは不可能なこととなる。では、この二書の關連はどのように説明されるのだろうか。

中世鎌倉期には「念仏聖」「勸進聖」などと呼ばれる沢山の聖たちがいた。彼らは理想とすべき僧侶たちの逸話を唱導してまわっていた。私はこれら念仏聖たちが、『西行物語』的の西行説話を唱導してまわっていた、と考える。成立の問題は何も『撰集抄』と『西行物語』の間にのみあるわけではなく、他の西行説話の載る説話集のほとんどの成立年次も、一二五〇年頃に集中している。そしてそれらの説話中にみる西行像といえ、廻国修行者としての西行・魅力的な出家譚と釈迦に比せられる往生譚を持つ西行・そして歌人として一目置かれる西行というように『西行物語』における西行像と共通する点が多いのである。これら一二五〇年頃に集中して登場する西行説話の背景には、念仏聖たちの存在と、彼らの唱導の過程で自ずと生じたであろう西行伝説の存在を考えないではいられない。

### 第三章 西行伝説の形成

今まで述べてきたように、西行は没後わずかの期間に、急速に伝説の人と化していくのであるが、一体それは何に因るものなのか。

ここに結論から述べるとすれば、

(1)かねてからの願望どおりのものであったという、その見事な最期。

(2)入寂譚を起点として問い直された生涯。そこで注目された八心無愁、遂に通世∨と評されたところの出家譚。

(3)没後十五年目に得た「新古今筆頭歌人」としての榮譽。

(4)これらをもとに西行について語って歩いた唱導聖たちの存在。

の、四点が相乗的に効果し合った結果である、と私は考える。

西行は生前から歌人として著名であった。まず『詞花和歌集』に一首入集し、そして『千載和歌集』では十八首の入集を果した。この十八首というのは千載集歌人として第九位に位置している。勅撰集でのこの実績のみならず、自撰「御裳濯歌合」の判詞を藤原俊成に託したこと、同じく「宮河歌合」の判詞を俊成の子息・定家に依頼し、その折に若い定家を励ます消息を書いていることなどからも、当時の、歌人・西行の位置が忍ばれよう。

その彼が、かねて詠んでいたという八願はくは花のしたにて春死なむその如月の望月のころ∨という歌のとおり、建久元年二月十六日に生涯を終えた。彼と親交の深かった

人々はその死に少なからず感動を覚えた。俊成の『長秋詠草』には次のように記されている。八かの上人、先年に桜の歌多くよみける中に願はくは花のしたにて春死なむそのささらぎの望月の頃かくよみたりしををかしく見たまへしほどに、つひにささらぎ十六日望月をはりとげけること、いとあはれにありがたく覚えて、物に書き付け侍る、願ひおきし花のしたにてをはりけり蓮のうへもたがはざるらむ∨すなわち、花と月とを愛した歌人の八花のした∨なる八きさらぎ望月∨の頃の入寂という意味からと、釈迦入滅を追うような「ささらぎ望日」の入寂という意味からとの二つの感動をこの文章から読みとることができる。ほかにも慈円『拾玉集』、定家『拾遺愚草』、後京極良経『秋篠月清集』にもその死は記し留められた。このように、都の歌人たちや彼に近しかった僧侶たちを中心に、西行の死は嘆美され、語り広められていったのだと思う。

こうして西行の入寂譚は立派な往生譚として語られたのであるが、その際には、おそらくその生前のことも人々の口にしたであろう。そこで注目を集めたのはやはり出家譚ではなかったか。いかに無常観流れる中世といえども、世を捨てるといふことはやはり困難なことであったと思う。だからこそ人々の道心を深めるための数々の発心・往生譚を集めた仏教説話集が流布したのである。まして重代の勇士の家柄であり、家は富み、院の北面として華やかな盛りの二十三才の若者・佐藤義清（西行俗名）が、その困難な出家を果したとすればどうであろうか。この八心に愁へ無

き▽出家は『発心集』に例をとってみても全一〇二話中、三話ほどみられるのみである。頼長の記したごとく、それは正に人々に嘆美▽されるべきものであった。そのような出家譚が、あの往生譚と共に語られるとすれば、西行を人々が別格視するのは必定である。

当時の唱導聖たちは、この格好の“語りの材料”を逃さなかつた。彼らがこの“材料”を“語り”として仕上げる際には脚色が行われ、事実とは違うもの、すなわち虚構部分が混じってくる。巷間に語られる逸話と彼ら唱導聖の創作とが相乗的に効果しあってその虚構部分は次第に大きくなっていく。ここに、西行伝説が生じていたのであった。

私は第一章で『西行物語』について考察するにあたり、その虚構形成の背後に、常に一人の作者を想定してきた。しかしここで訂正をしたい。『西行物語』は、当時の西行伝説を吸収し、それをもとに作者が構想を立てて成立させた物語である。もちろん、言うまでもなく、他の西行の説話もこれに等しい。

ところで、唱導聖たちが中心となって西行の伝説を形成していく、その背景について坂口氏は、△西行の人生営為は、後の遁世聖が自らを語る寄り所として共感・支持されたのであり、規範性をも示すものとして受けとめ受け継がれて▽いったとされる。その、△共感・支持▽され、△規範性をも示す△西行の人生営為▽とは。

西行の出家直後の詠歌に次のようなものがある。△鈴鹿山うき世をよそにふりすてていかになりゆくわが身なるら

む▽。水原氏<sup>注5</sup>はこの歌を、こう評される。△西行は今鈴鹿

山中にいる。同時に微かな振鈴の中にいる。その不協和音の微音が、決行後の己れの道を詰問し、戦慄させる。この歌は課題である。中略、しかもその課題こそが彼の五十年を貫くことになるはずであった。▽西行は真の△心なき身▽となるべきその△課題▽に向かって一生を過ごした。そこには常に自分の心を凝視しつづける冷徹な目があった。△いかにかすべきわが心▽△思へ心▽△あやしや物思ふらし▽△心のはてを知るよしもがな▽。つかみどころのない自分の“心”を西行は、多くの歌に記し留めている。水原氏は、その△“心”の正体を追う彷徨▽こそ西行の一生であったと述べられる。そして、△出家ののちは世中にしばしもあとをとどめむことよしなしと思ひて、ふかきやまやまたうときとどめむところを修行しけり▽として、まさに一所不住の思想を貫き、漂泊の一生を終えた『西行物語』の西行像を、虚構でありながら実は△抽象的には真実を直指している▽ものときされている。虚伝形成当時の人々（聖を中心に）の西行観、それを反映した西行説話には必ず真の西行に迫る何かがあると私は考える。水原氏の論に、その“何か”の答をみると言つてよいのではないだろうか。

とにかく、今述べたような西行の△人生営為▽、またそこに記し留められた和歌の数々、それは「乱世」「末世」と呼ばれた時代を生き、仏道を志しながらも“心の彷徨”を禁じ得なかつた同じ痛みを吐露するものとして遁世聖たちに△共感・支持された▽のであった。その上で、西行の

“ありがたき”往生譚が彼らの胸を打ち、△規範性を示すものとして受けとめられ、△た。このような共感や支持があったからこそ通世聖たちの“語り”は熱を帯び、一時期に多くの西行説話が書物に登場することとなったのである。

ここで一つ付け加えをしたい。西行の別格視は当時の歌壇においても同じであった。ということである。当時の歌壇においては、言わばアウトサイダーであった西行が、

『新古今和歌集』に九四首入集という快挙を成し遂げ、  
“新古今筆頭歌人”としての名声を得た。そのほか、藤原定家撰『八代集秀逸』に五首（最高）、同『百人秀歌』に

一首、また西行を△不可説の上手▽（『後鳥羽院御口伝』）と評された後鳥羽院撰の『時代不同歌合』においても三首が採られるのである。

こうして、没後なお高まる歌人・西行の名声が、西行を語る唱導聖たちにとっては好影響を及ぼすことになる。すなわち“あの著名な西行法師の話”として、語られ・聞かれ、西行説話は広く巷間に流布していくのである。

### 結び

一二五〇年頃を中心に、多くの西行説話が登場した。その西行説話を分析し、検討した結果、一つの共通した西行像が浮かび上がり、その背景に『西行物語』的伝説的存在を考えるに至った。そして分析結果をもとに、その伝説形成の源に位置するものを明らかにしてきた。すなわち、西行の願望通りの最期が人々の感動を呼んだことが最も根本に位置し、そこに人々に嘆美された出家譚が結びつく。こ

の△ありがたき▽出家譚・往生譚は西行に近い人々を中心に語られ、それは当時に存在した唱導聖たちの知るところとなる。やがて、西行の歌にみる△人生営為▽（坂口氏）と出家・往生兩譚に大いなる共感・憧憬を抱いた唱導聖たちは熱弁を振るい、また折から得られた“新古今筆頭歌人”としての名声は高まっていた。それらは相乗的に効果しあい、西行の話は急速に巷間に流布しはじめることになる。そして、こうした過程を通じて、没後間もなくして西行の伝説は生じたのであった。

これをもって本論の結論としたい。

補注 1. 『西行物語』のたねとしくみ・伊藤嘉夫『跡見

学園国語科紀要』12号

2. 「『西行物語』考」坂口博規『駒沢国文』第13号

3. 「西行物語の形成」谷口耕一『文学』昭53・10

4. 「『西行仮託』の説話評論」西尾光一『日本文芸

の世界』昭43・5

5. 「脱出―西行」水原一『国文学』昭48・7